



「感謝」研究の必要性

道德科学研究センター副センター長
廣池千九郎研究室室長

みやした かずひろ
宮下和夫



「感謝」という言葉は、私たちが日常的に用いている言葉であり、また、モラロジーにおける「伝統」や「報恩」といった言葉とも密接に関わり合うものでもあります。私は自分の専門領域として、いわゆる「世界の四聖人」の一人・孔子に源流を持つ儒教(儒学)の思想について研究をしています。儒教の領域では「感謝」に関わる事柄は「忠」や「孝」という言葉で「間接的」に語られてきました。なぜ「間接的」というのかと言うと、「忠」や「孝」に伴う「ありがたいことだな」と思う感覚や、「ありがたいことだな」と感じさせる背景そのものについては、儒教ではあまり語

られることがないように思えるからです。仏教では「恩」について知ること(知恩)や感ずること・報いること(感恩・報恩)を繰り返して語ってきたのに対して、儒教ではその部分をあまり語らないように見えるのです。そのためなのでしょう。現代においては「忠」や「孝」という言葉は、なかなか理解も共感もしづらいものになりつつあります。そこで、今一度、私たちが日頃から用いている「感謝」を軸にして、私たちの文化が育んできた「感謝」を検討・分析し、「感謝」の内実を描き出せないかということを考えています。

現在、心理学における感謝の研究が非常に勢いで進んできています。とりわけ、日本人の感謝感情には、欧米諸国と比較して「申し訳ない」とか「すまない」という感情が伴っていて、そのことが日本的(もしかすると東アジア的)な「感謝」の文化であることに注目が集まってきています。しかし、一般的に行われている研究では、特定の人物に対する感謝が中心となっており、また、普通の人々が抱く感謝を中心に取り扱っています。ここにモラロジーならではの研究との接点があります。

モラロジーは、「オーソリノン(伝統)」という切り口を通じて「感謝」を考え直す学びであると私は常々感じています。モラロジーで考える「感謝」は、特定の現存する人物だけを対象にしたものではなく、もっと大きな広がりを持つものです。更には「嬉しい出来事」にだけ感謝するのではなく、むしろ「つらい出来事」や「試練」に対しても感謝できるかどうかを考えるような世界でもあります。